



海外作家賞 / 陳 敬寶 (Chin-pao Chen) = 台湾市在住

1969 (昭和44) 年、台湾・馬祖北竿島生まれ。1999 (平成11) 年、スクール・オブ・ヴィジュアル・アーツ写真学科卒 (米国ニューヨーク市)。同年、台湾で大きな風潮と議論を引き起こした文化現象といわれた「片刻濃妝：檳榔西施」シリーズで台北市写真祭新人賞受賞。同シリーズは、2008 (同20) 年、フランス・パリ世界文化会館のグループ展に出品され、2009 (同21) 年、国立台湾美術館コレクション。小学校の先生としてのキャリアを生かし、2001 (同13) 年から、子供のころの回想シーンを再現して撮影するプロジェクト「廻返」をスタート。また「天上人間」シリーズでは、住居と隣接している墓の撮影を通じて、現世と来世が共存する台湾庶民の社会的風景をとらえました。2008年韓国大邱写真ビエンナーレに参加、2009年台北美術賞優作受賞。台湾中堅世代を代表する写真家として活躍しています。



Pao-Pao and Hsiao-Ying, Taipei County, 1998
A Moment of Beauty: Betel Nut Girls (片刻濃妝：檳榔西施)



Heaven on Earth (天上人間) #4, 2009



国内作家賞 / 北島敬三 (きたじま・けいぞう) = 東京都内在住

1954 (昭和29) 年、長野県生まれ。1975 (同50) 年、成蹊大学 (法学部) 中退。同年「WORKSHOP写真学校」の森山大道教室に参加。初めて基地の街コザ (沖縄県) を訪れる。連続展「写真特急便」を開催。1981 (同56) 年、日本写真協会新人賞を受賞。1983 (同58) 年、写真集『New York』で木村伊兵衛賞受賞。その後東欧を経て1991 (平成3) 年、崩壊直前の旧ソビエト連邦に属する15共和国を撮影。被写体に正対しながら、カラーフィルムで職業などの帰属先が分かるようなポートレート撮影を行う。それらの写真は、16年の歳月を経て作品「USSR 1991」として発表、伊奈信男賞を受賞。1992 (同4) 年から現在に至るまで、大型カメラを使用した「PORTRAITS」「PLACES」シリーズを継続発表。2001 (同13) 年から写真家たちとの共同運営による「photographers' gallery」(東京・新宿) を拠点に、雑誌の出版や講座、上映会など多角的な活動を展開しています。



KOZA, 1977



NEW YORK, 1982



U.S.S.R., 1991

海外作家賞、陳敬寶 (チン・パオチエン) 氏
1996 (平成8) 年から開始された「片刻濃妝・檳榔西施」シリーズで台北市写真祭新人賞。このシリーズは、セクシーな衣装を着た若い女性が道沿いにある小さなガラス張りのスタンドで、運転手や道行く男性にピンロウを売るといったシーンを撮った肖像写真作品。台湾で大きな風潮と議論を引き起こした文化現象です。2008 (同20) 年、フランス・パリ世界文化会館のグループ展にも出品され、翌年国立台湾美術館のコレクションになりました。自身の小学校の先生としてのキャリアを生かし、2001 (同13) 年から描いてもらった子供のころの回想シーンを再現して撮影するプロジェクト「廻返」をスタート。ドキュメンタリーとステージドフォトの結合を試み、現実とパフォーマンクス、写真と記憶の間に揺れるあいまいな境界を探っています。「天上人間」シリーズでは、住居と隣接して存在する墓を撮影し、現世と来世が共存する台湾庶民の社会的風景をとらえました。2008年、韓国大邱写真ビエンナーレに参加。2009年台北美術賞優作を受賞。初期のころから写真の芸術性を探求し、台湾中堅世代を代表する写真家として活躍しています。

国内作家賞、北島敬三氏
1975 (昭和50) 年、森山大道教室「WORKSHOP写真学校」に参加。翌年、「森山教室」のメンバーと共に自主ギャラリー「CAMPA」設立。基地の街コザ (沖縄) を撮影舞台に、従来の展覧会の枠組みを刷新する連続展「写真特急便」を開催。ノーフアインダー、フラッシュ撮影などを自在に使う鋭敏なスナップシューターとして高い評価を受けました。沖縄とアメリカを経由した視線は、1991 (平成3) 年、崩壊直前のソビエト連邦に属する15の共和国に向かい、被写体に正対しながら、カラーフィルムで職業などの帰属先がわかるようなポートレート撮影を行いました。それらの写真は、16年の歳月を経て、作品として発表した「USSR 1991」で伊奈信男賞を受賞。92年から現在に至るまで、大型カメラを使ってそれまでのスナップショットとはまったく方法論が異なる「PORTRAITS」と「PLACES」の2シリーズを継続発表。アーカイブとしての写真の在り方を模索しています。2001 (同13) 年から写真家たちとの共同運営による「photographers' gallery」(東京・新宿) を拠点に、雑誌の出版や講座、上映会など多角的な活動を展開しています。日本と米国、東洋と西洋という2つのバックグラウンドを背負った二元性

とその葛藤を軸に、記憶、歴史、家族などをモチーフとしながら制作を続けています。妻の故郷、沖縄で、終戦時に集団自決した歴史的背景がある断崖での体験をもとに始めた「パンタ」シリーズ (2005-2008) は、複数の写真をデジタル合成によってつなぎ合わせ、めまいのするようなパースペクティブと奇妙なりアリティを持った作品を制作しました。闇に閉ざされた洞窟を高解像度のデジタルカメラと人工光で長時間撮影した「ガマ」シリーズ (2008-) とともに、特殊に身体化された視覚経験を誘います。特別作家賞、萩原義弘氏
2007 (平成19) 年、毎日新聞社出版写真部を経てフリー。1982 (昭和57) 年、前年に起きた夕張新炭鉱の突出ガス事故で、その影響が残る夕張を訪れ、以降夕張と東京を往復しながら継続的に撮影を続けています。事故後から閉山までの過程を追う中でジャーナリズムに興味を持ち、新聞社の写真部に勤務。仕事のかたわら、当時続々と閉山されつつあった全国の炭鉱や鉱山の記録撮影を続けました。ジャーナリズムではほとんど報道されることのない閉山後の状況を自分の目で見ていこうとするなか、造形的な美学に裏打ちされた「6×6」フォーマットで、廃墟写真とは一線を画して人の生活の気配を感じられるような作

品を制作。2004 (平成16) 年、夕張を中心に、全国の廃坑や鉱山跡を撮影した写真集「巨幹残栄・忘れられた日本の炭鉱」(窓社刊) を出版。2008 (同20) 年、雪という自然の流動的なフォルムと、それに抱擁されつつも対峙する炭鉱跡の人の痕跡を独特の視点でとらえた写真集「SNOWY」(冬青社刊) 出版。2009 (同21) 年、東京都目黒区美術館で開催した「文化」資源としての炭鉱展で、83年に撮影した写真と同じ場所を2008年に再度撮影した「夕張定点観測」の写真を発表しました。30年近くの歳月を経てなお継続的に夕張に通い、炭鉱跡の記録を続けるとともに、その記憶を表現する手段を探求しています。

◆

本年度審査委員会は今年3月、東京都内で行われました。◇第26回写真の町東川賞審査委員会
浅葉克己 (グラフィック・デザイナー) ▼岡部あおみ (美術評論家) ▼菅原美智子 (写真評論家) ▼楠本亜紀 (批評家、キュレーター) ▼佐藤時啓 (写真家) ▼野町和嘉 (写真家) ▼平野啓一郎 (作家) ▼山崎博 (写真家) 以上8人 (敬称略、50音順)